



# 「よるによる会への継続参加と 関わりの変化に関する調査」

実施期間：2025年4月～2025年8月  
調査対象：よるによる会参加者

1

分析執筆：松村 智史 先生  
(名古屋市立大学 人間文化研究科・人文社会学部 准教授／横浜市立大学 国際マネジメント研究科 客員准教授)

## 調査概要

---

調査対象：よるによる会参加者（大人74名）

調査方法：QRコード読取りによるオンラインアンケート

実施時期：2025年4月～8月

実施場所：5か所（大倉山、綱島、篠原、菊名、日吉にある法人事業所）

実施回数：6回

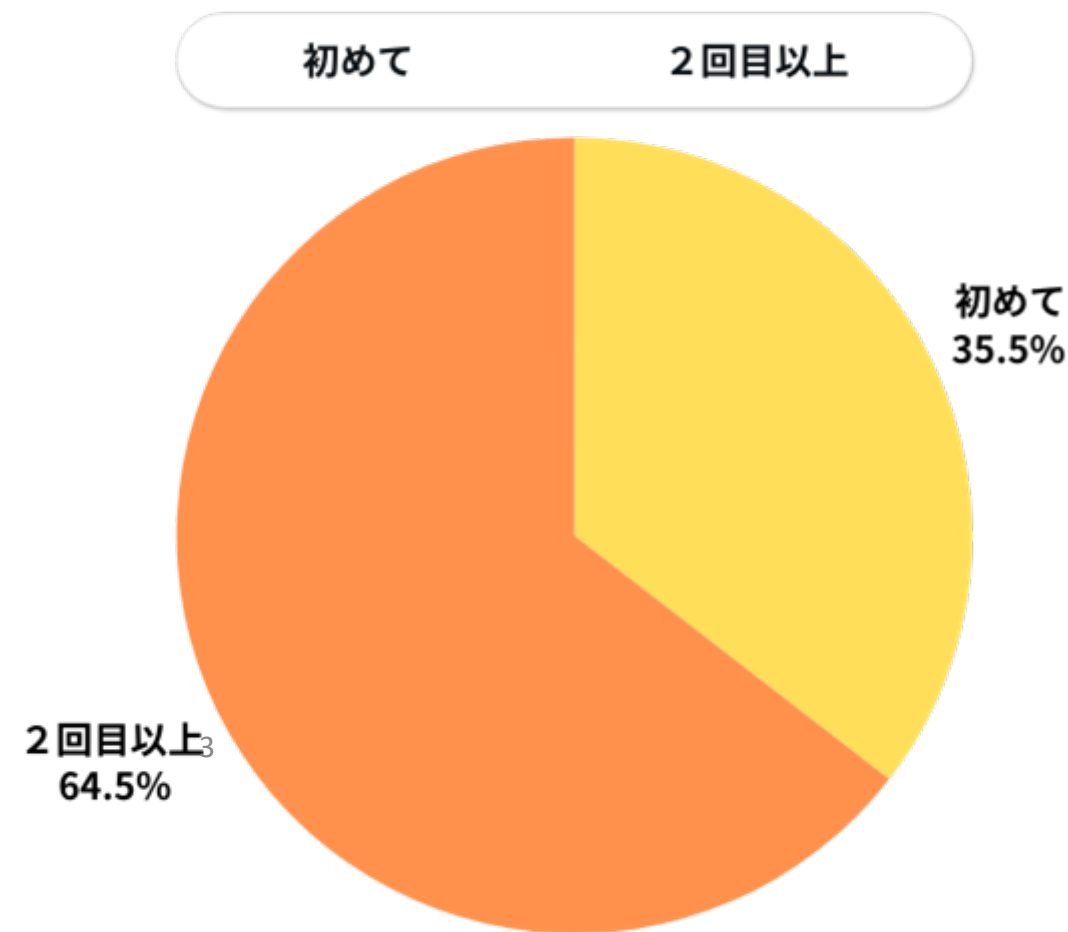
回答者数：62名

## よるによる会 参加継続率とこどもの参加状況（年齢・学齢別）

■よるによる会の参加状況を見ると、2回目以上のリピーターの割合が高く、一度限りの利用にとどまらず、継続的に会へ足を運ぶ者が多い。これは、会が、単なる食事提供の場ではなく、安心して通える継続的な居場所やコミュニケーションの場として機能していることを示している。

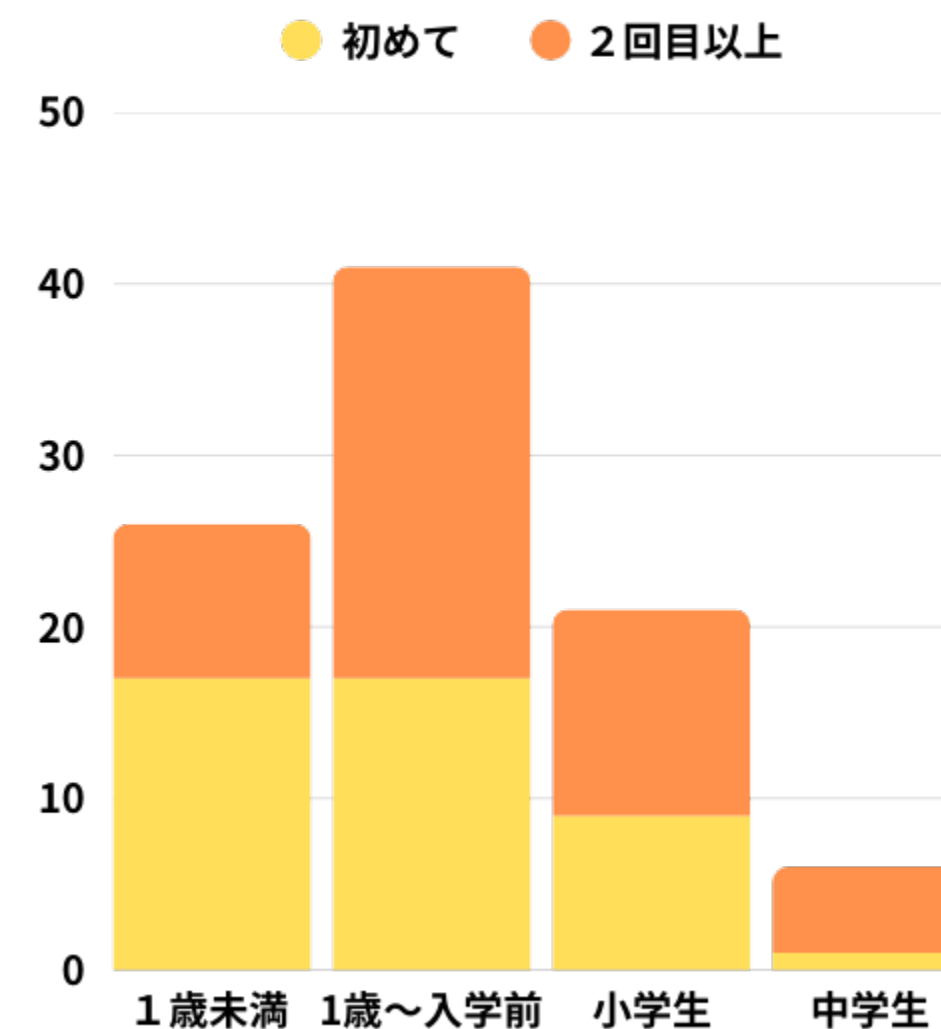
■また、初めての参加者の多くは就学前のこどもを持つ家庭であったが、リピーター層には中学生も増えており、参加対象が家族全体へと拡大している点も注目値する。ひろばの利用から会につながった参加者が多いため、初回参加では就学前のこどもが多いものの、2回目以上では、中学生が増えているのである。会の魅力が、小さな子どもにとどまらず、兄弟姉妹など多世代の他の家族に波及し、家族ぐるみで継続的に関わることのできるコミュニティとして機能しているといえる。

### 参加者のリピーター率



|         |     |
|---------|-----|
| 初めて参加した | 22名 |
| 2回目     | 19名 |
| 3回目以上   | 21名 |

### 参加したこどもの分類

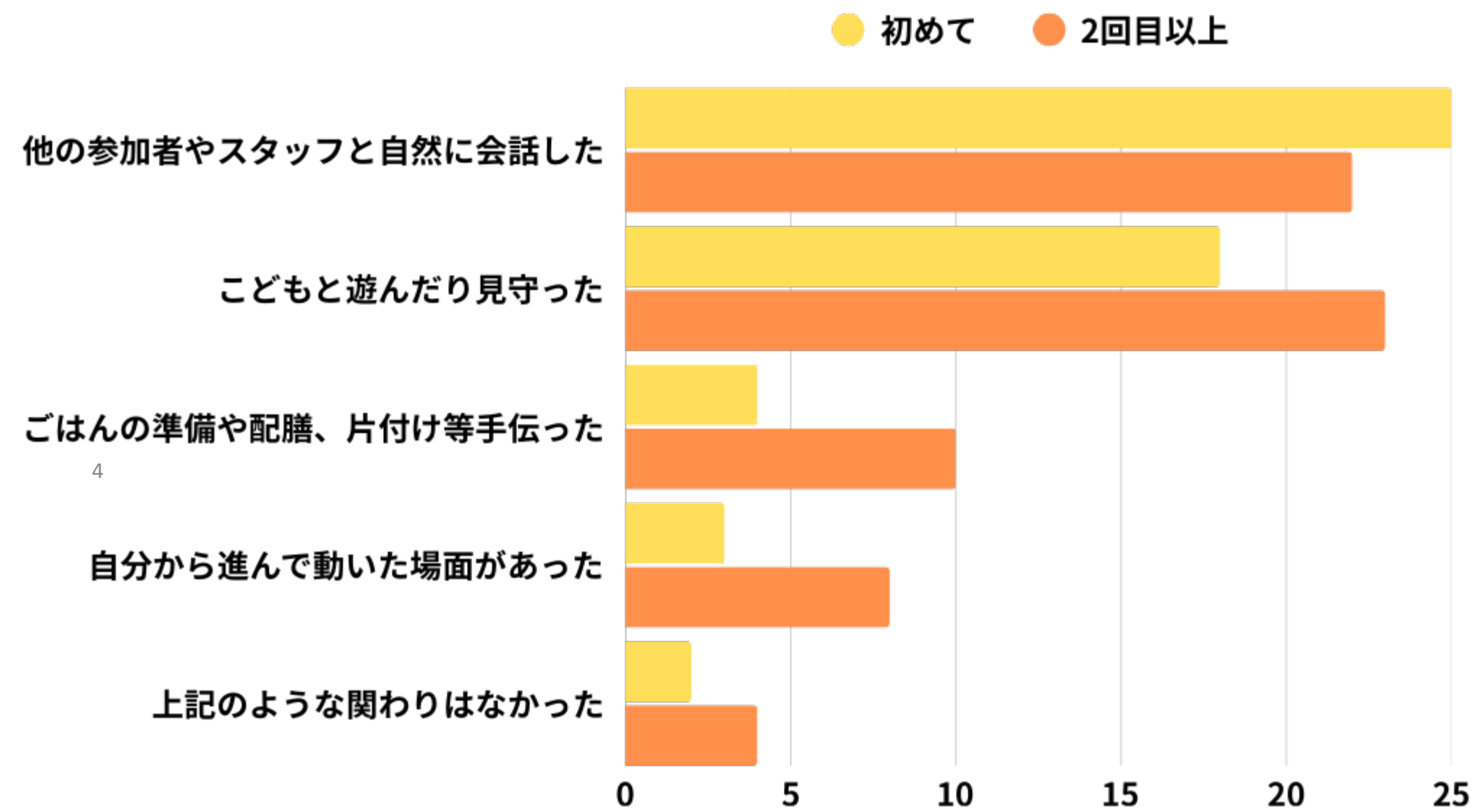


# よるによる会の中での参加者の役割や関わり方の変化

■ アンケート結果からは、初回参加者とリピーターの受け止め方に明確な差異が見られる。初めて来た者にとっては「自然に会話した」「見守った」といった、まずは活動に参加して安心感を得たことが中心的な感想となっている。これは初めての場に不安を抱きながら参加した者が、居心地の良さや食事を通じて、安心を得ている姿を示している。

■ 一方、2回目以降の参加者は「手伝った」「自分から選んで動いた場面があった」と述べており、より積極的かつ主体的な感想へと変化している。すなわち、参加形態が、利用するという段階から、積極的に関わる・貢献するという方向へとシフトしているのである。この変化は、会が単なる支援の受け皿ではなく、参加者が主体的に関与できる共助の場へと発展していることを示唆している。

次のような関わりはありましたか？



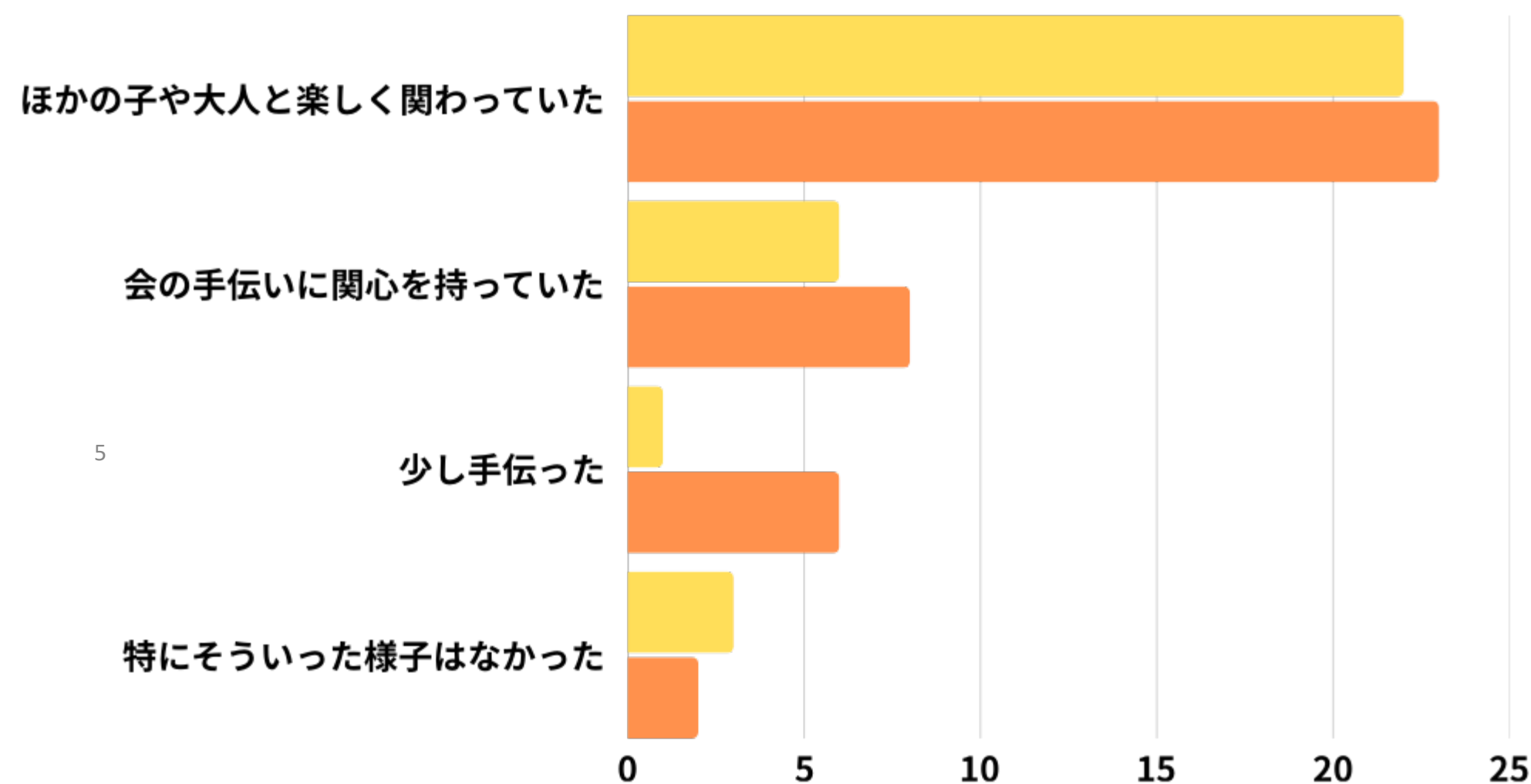
# よるによる会の中でのこどもの変化

■初回参加と2回目以上の違いを比較すると、両者には、共通性と相違点がある。まず、共通しているのは「ほかの子や大人と楽しく関わっていた」という肯定的な体験である。初めての者にとって、新しい出会いや雰囲気や安心につながり、居場所としての第一歩となる。他方で、2回目以上の者は、すでに安心感を獲得しているため、次の段階として、人との関わりや役割意識が芽生えることが考えられる。

■会は一貫して安心感と交流を提供する場であると同時に、参加回数を重ねることで主体的参加へと発展するプロセスを持つ場であるといえる。

## お子さんは以下のような様子がありましたか？

● 初めて ● 2回目以上



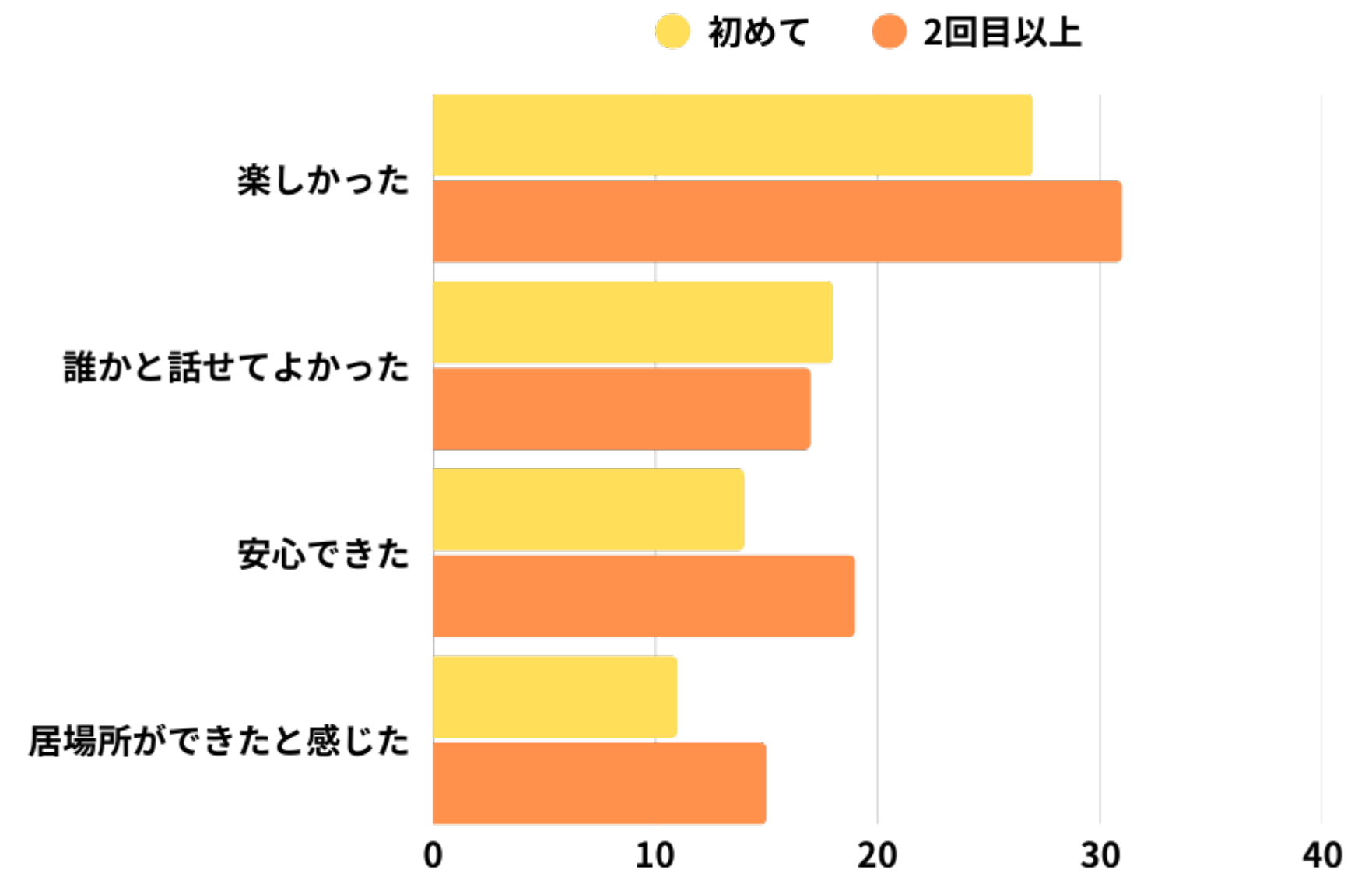
5

# 会で得られる実感

■大きな特徴は、初回参加者にもリピーターにも「楽しかった」「誰かと話せてよかった」「安心できた」「居場所ができたと感じた」という、充実感や安心感を同時に与えている点にある。食事という身近な営みを介することで、参加者は、安堵の思いや他者との交流体験を得る。その上で、会話や交流を通じて人とつながる楽しさを実感し、孤立感を軽減する効果が生まれていると考えられる。

■特に、2回目以上の方が、「楽しかった」「安心できた」「居場所ができたと感じた」という回答が高い傾向にあることは、とても興味深い。安心や安堵の上で、顔見知りになった人などと食事を通して会話したり交流することがますます重要になっていることが考えられる。

## 参加してどう感じましたか？

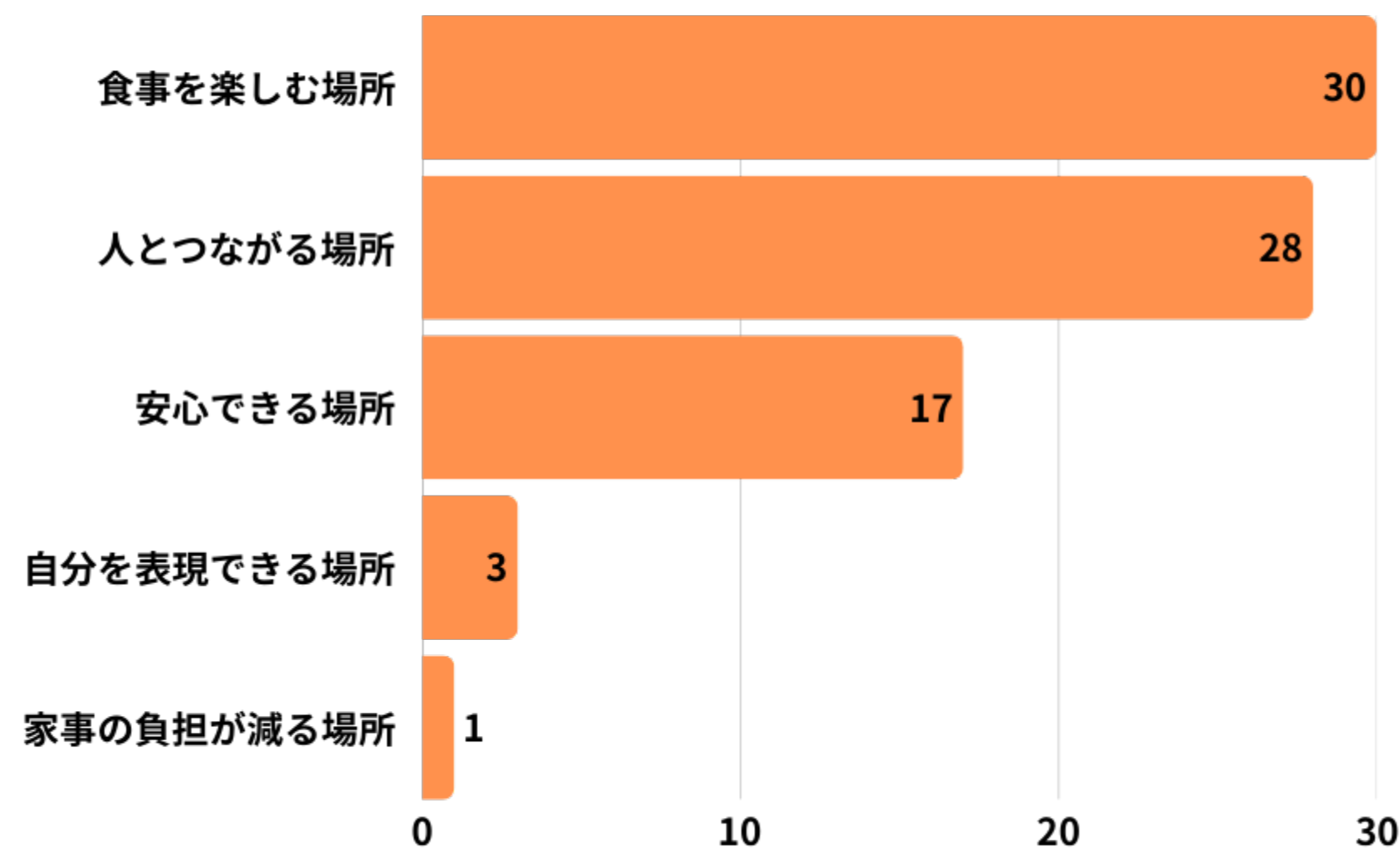


# 継続参加者にとってのよるによる会の存在

■ 2回目以降の参加のリピーターへの質問結果では、「食事を楽しむ場所」「人とつながる場所」という回答が多かった。会が、楽しさや、人とのつながりを感じることができる貴重な機会となっていることがうかがえる。

■ 他方で、家事の負担軽減という側面はあまり強調されなかった。家事軽減という利点よりも、楽しさや、人とのつながり、安心できる場所であること重視されている。また、継続参加者にとって、会は、負担を減らす場所ではなく、楽しさ、安心、つながりを得ることができる場所であり、そのことが継続的な参加につながっていることが考えられる。

## よるによる会はどのような場所だと感じますか？ (2回目以降の方のみ)

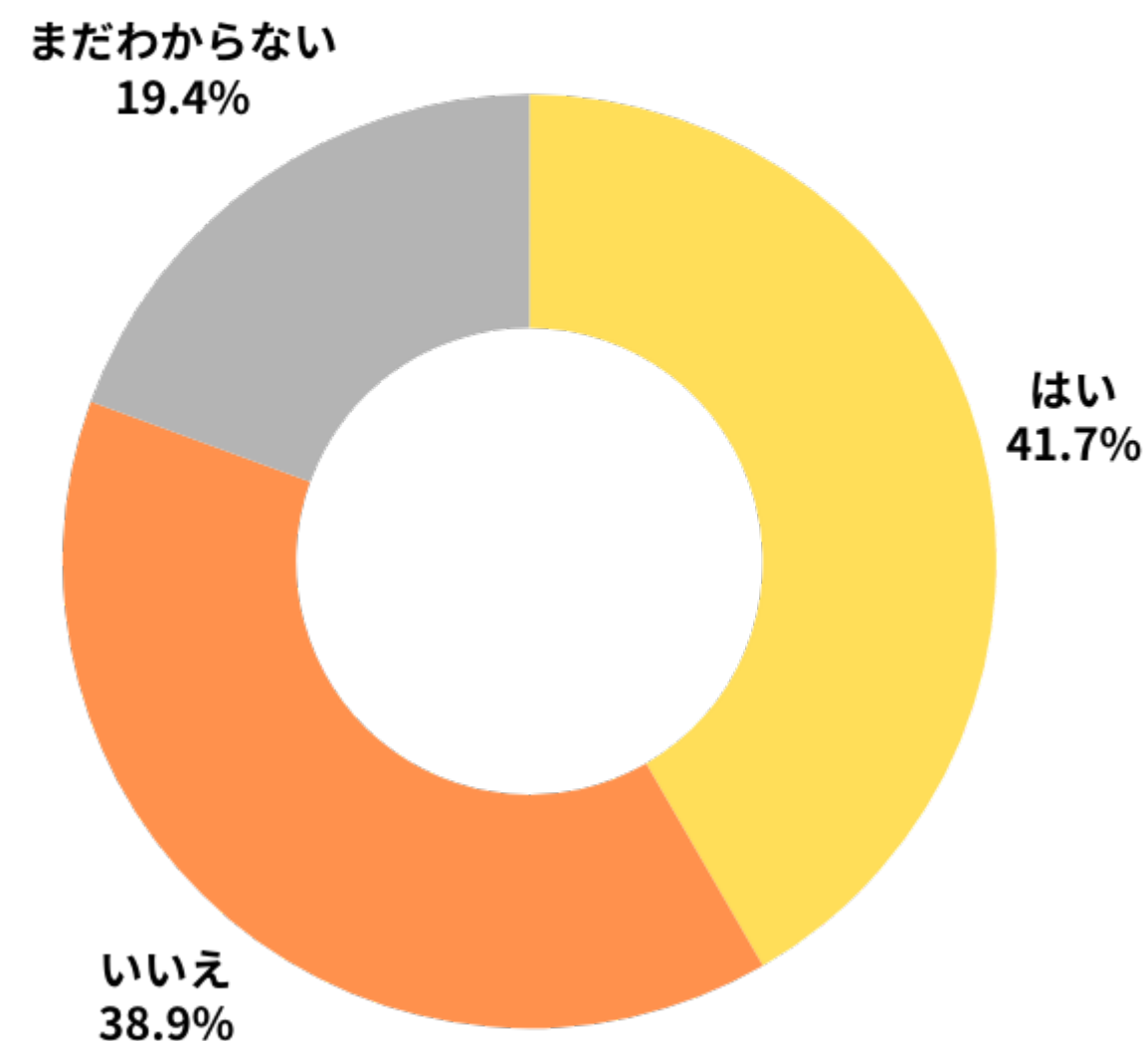


# よるによる会への参加者から担い手への移行について

■ 2回目以降参加のリピーターの回答には、よるによる会の運営に関わってみたいという、前向きな意欲が多く示されている。これは単なる利用者の立場にとどまらず、主体的に関与したいという気持ちが高まっていることを意味している。会への参加は、自分も役割を持ちたい、他者の助けになりたいというという感覚を生む契機となっている。

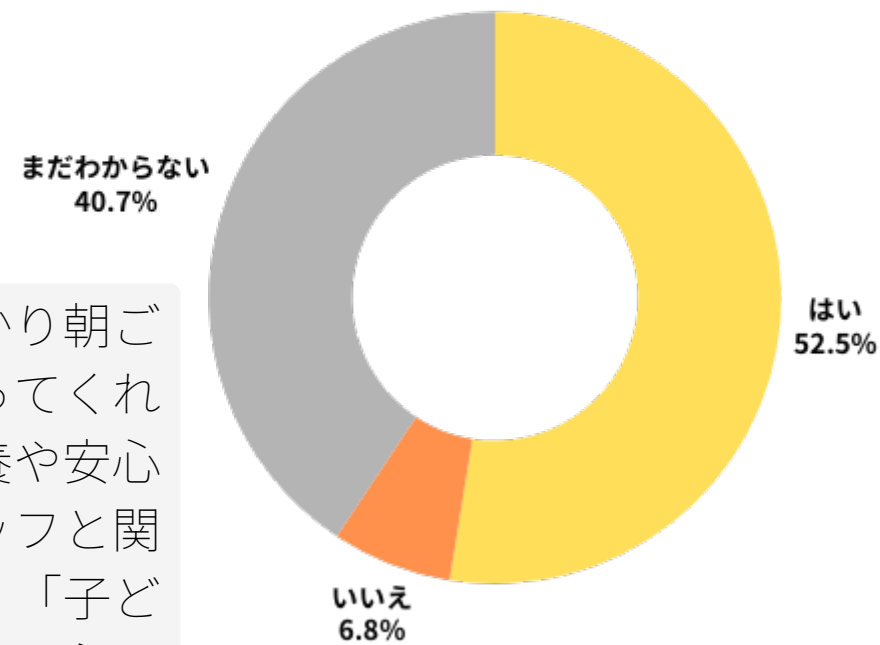
■ また、継続参加を通じて、役割を担うという意識が育まれることや、誰かの役に立っているという感覚は、参加者に肯定的な影響を及ぼし得るものといえる。誰かを支えることや、そこから得られる充実感や、やりがいは、自分自身を肯定したり、自信につながり得る、貴重な契機といえる。利用者から支援者へという地域における循環を生むものともいえる。もこのように、会は、自己実現や社会参加を可能にする場としても重要といえる。

## よるによる会の運営に関わってみたいですか？ (2回目以降の方のみ)



# 朝食会があったら参加してみたいか

朝食会があったら参加してみたいですか？  
(初めて・2回目以降)



■朝食会への参加理由や魅力としては「しっかり朝ごはんを食べられるのが嬉しい」、「誰かが作ってくれたご飯を食べられるだけで幸せ」といった栄養や安心に関する点に加え、「朝から地域の人やスタッフと関わり、一日をいい気持ちでスタートできる」、「子どもが楽しそう、親子で気分転換できる」といった心理的・社会的効果が挙げられている。さらに「いつもと異なる雰囲気です食事を共有でき、新鮮」「孤独になりがちな朝食を分かち合える」など、多面的な魅力が存在することがうかがえる。

■共働き世帯やひとり親世帯などにとって、食事の準備や、誰かと食事を共にしたり、コミュニケーションをとることは、簡単なことではない。家族の孤立化や、学校の長期休み時には、子どもの欠食や孤独も心配される。こうしたなか、会は、多面的な意義を持っていると評価できる。

## 参加したい理由・魅力

普段はパンやヨーグルト程度なので、しっかり朝ごはんを食べられるのが嬉しい  
ご飯がおいしいから、誰かが作ってくれたご飯を食べられるだけで幸せ  
朝から地域の人やスタッフと関わり、一日をいい気持ちでスタートできる  
子どもが楽しそう、親子で気分転換できる  
いつもと違う雰囲気です食事を共有でき、新鮮  
孤独になりがちな朝食を分かち合える  
朝のコーヒータイムも楽しめる  
朝の方がそのあとゆっくり過ごせる  
夏休みや冬休みなどの長期休みに参加できそう  
子どもをその場で遊ばせられる場があると嬉しい  
準備の手伝いもしたい（子どもが小さくても大丈夫な雰囲気なら参加したい）

## 参加へのハードル・課題

早起きが苦手、寝坊や準備に時間がかかる  
起きてすぐお腹が空くため、時間が合わない場合がある  
平日は用事や仕事、休日でも夫不在で準備が大変  
仕事をしているため時間に余裕がない  
自転車がなく遠い、電車移動で子連れ参加は大変  
朝の準備が間に合わなさそう  
開催形式や曜日によって参加可否が変わる  
暑さで外出が億劫だが、朝なら比較的行きやすい

# まとめ

---

■よるによる会の特徴として、リピーターの割合が高く、一度限りの利用ではなく継続的に参加する者が多い点が挙げられる。このことは、単なる食事提供の場にとどまらず、安心して通える居場所、さらに交流やコミュニケーションの貴重な場として、会が機能していることを示している。

■また、初回参加者は就学前の子どもを持つ家庭が多いが、回数を重ねるにつれ中学生の参加が増え、参加対象が家族全体へと拡大している点も注目に値する。アンケート結果からは、初回参加者は、安心などを強調する一方、2回目以降の参加者は、手伝った、主体的に動いたという回答が増えており、利用のみならず、主体的関与へと移行していくプロセスが示された。共通しているのは、楽しさや人とのつながりといった体験であり、参加回数に応じてその意味が深まっていく。リピーターは家事負担の軽減よりも、安心や、人とのつながりといった、価値を重視しており、これが継続参加の動機になっているともいえる。

■さらに、朝食会についても、地域との関わりなどで魅力的に感じられており、孤立感の緩和に寄与することや、長期休暇時の子どもの欠食防止、家庭の孤立解消にもつながり得るといえる。

■会は、食事支援を超えて、地域の居場所として多面的な意義を有しているといえる。

